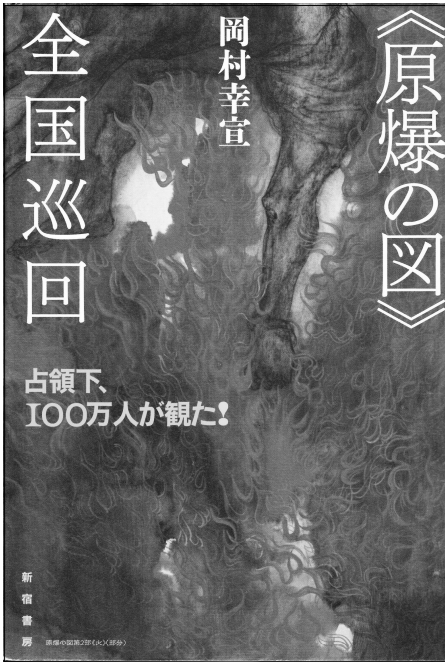


岡村幸宣著 『《原爆の図》全国巡回——占領下、100万人が観た!』

東村 岳 史



本書はすでに主要全国紙やブロック紙、書評紙等でそろって取り上げられ、きわめて高い評価が与えられている(簡単に一覧するには、発行元の新宿書房のホームページを参照)。決して派手とはいえない、むしろ地味ともいえるこの本がこれほどの注目を集めたのはなぜか、それ自体も興味深いといえないことはないが、地道な研究が正当な評価を受けたという意味では素直に喜ぶたい。そして私自身の本書に対する評価も、他紙の論者とほとんど変わるところがない。それなのにいまさら屋上屋を架すような書評を書くことに意味があるのか、正直逡巡した。本書の貢献をただほめたたえるだけでは紙面のむだであろう。そこで、ここでは、本書を読んだだけではわからない著者からの反応を引き出すことを心がけ、問いや感想を投げかけてみることにしたい。

私が著者の岡村氏とはじめてお目にかかったのは、二〇〇九年の戦後文化運動合同研究会・原爆文学研究会の席である。当時の印象が正しければ、見る側の身体に働きかける「原爆の図」という絵は、まさに研究会の中心的なテーマとしてふさわしいものだ

った。岡村報告は時宜を得たのである。

その後本書の刊行までに起こった重大な出来事として、東京電力福島第一原発事故の影響は、本書にも時代の刻印を残している。本書の内容は、原発事故後中止になってしまった目黒区美術館の「原爆を視る」展に発表される予定だったという。そのせいもあって、「原爆の図展」が結果的に「原爆反対」とともに「原発推進」の論理を全国的に広める役割を担っていたという事実もまた、無視することはできない」（一五四頁）という短い一節に、私の目は止まってしまふ。福島以後に「原爆」と「原発」を重ね合わせて考えなければならなくなった、私たちの時代における過去の見直し、読み返しの必要性と可能性を示しているからである。

大道あやと丸木夫妻の關係に見られるように、原爆についての表現行為は、被爆者と非被爆者、目撃者と非目撃者といった具合に、表現の信憑性や代表性などをめぐって絶えざる線引きを引き起こしてきた。身内からの批判を丸木夫妻は重く受け止めたことは想像に難くない。ただ、絵の真実性や当事者性をめぐって分断が生み出された側面がある一方で、絵に力を得て被爆者が非被爆者の理解を促す機会を提供した側面もある。この絵と巡回展の尽きない魅力は、立場を異にする者たちとの間の交信の困難さと越境の可能性の両側面が出現する空間、そのうちでも後者の側面を主として垣間見させることにあるように思う。その全体像に接近することに本書は十分成功している。

地道な研究ということ一言ふれておきたいのは、岡村氏と各地の研究者との連携である。本書の参考のため、北海道における巡回展を詳述した白戸仁康「GHQ占領下の「原爆の図」北海道

巡回展」（正木基編『文化・資源としての〈炭坑〉展——「夜の美術館」・講義録』目黒区美術館、二〇一二年）も参照してみたところ、岡村氏と白戸氏が互いの知見を提供し合って巡回展の実態を明らかにしていく様子が確認できた。本書のみならず、岡村氏の研究を支えた白戸氏ら各地の研究者や在野の人々の仕事に対して合わせて光が当てられるとよいと思う。地道な作業により、埋もれていた五〇年代の巡回展の連鎖が、六〇年近くを経て記憶の連鎖として立ち上がってくる手応えを、本書はたしかなものとして伝えてくれる。

また、他の書評氏のほとんどが「丁寧な調査」や「労作」としていることと合わせ、本書が親しみやすさを読者に与えている理由として、初学者にも親切な注や多くの図版等の資料提示、索引といった丁寧な本作りの姿勢があげられる。岡村氏は一般書か研究書か読者層のねらいに迷ったそうだが（評者との立ち話）、評者は両方を兼ね備えた著作だと思う。一部の専門家がわかればよいという独善性は本書にはまったたく感じられない。それでいて調査に基づく新しい発見が盛り込まれている。これが各紙の書評でそろって取り上げられた理由の一つであろう。

以下では構成や概要の紹介は省略し、評者が理解を深めたいと思っていることを述べる。評者自身の知見はかぎられているので、他の先行研究（ヨシダ・ヨシエ『丸木位里・俊の時空——絵画としての「原爆の図」』青木書店、一九九六年、小沢節子『「原爆の図」』描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』岩波書店、二〇〇二年）や関連文献（テッサ・モーリス＝スズキ編『ひとびとの精神史 第2巻 朝鮮

の戦争 1950年代』岩波書店、二〇一五年）を手助けに著者の考えをうかがいたいと思う。

一点目は、巡回展の不思議な魅力と観衆の反応についての掘り下げである。通常の展覧会のかしこまった鑑賞態度とは異なり、「原爆の凶展」に詰めかけた観衆の様子には、祝祭性を帯びた不思議空間とも呼びたいような空気が感じられる。これは私が最初に小沢氏の『「原爆の凶」』を読んだ時から、この不思議さはどこから生じているのか、もっと知りたいと感じていたことでもあった。小沢氏の著書の中に、ヨシダ・ヨシエの著作から次のような一節が引かれている。「原爆の凶」が原爆体験がいかなるものかという「重大な手がかりをひらいてみせたことに、人びとは驚き、恥じ、苦痛をかくそうとしないで、このいつ果てるともない移動展を守ってきたのであった。憎しみもさることながら、わたしは、どれほど多くの観客のなかに、つよい恥じらいをみいだしてきたことか（『丸木位里・俊の時空』一六九頁）。小沢氏が言及しているように、「恥じらい」の感覚は「日本人の戦争認識のありかた」とも関わってくるものだろう（『「原爆の凶」』一七七頁）。ただ、私自身は「恥じらい」の中身をもう少し具体的に説明することはできないものだろうかという、ないものねだりのような欲求を抱き続けていて、岡村氏の著書を読んだ後でも依然として残っている。人々から「恥じらい」を感じ取ったヨシダの感覚が正しいければ、「恥じらい」とは何で、何へとつながっていったのか。これは岡村氏自身も述べる、丸木夫妻の「そもそも描いていいのかという内省」^⑥にもつながってくるようにも思えるのである。

二点目は、時期と場所、観衆の多様性による反応の違いである。

観衆の多様性については、米山リサ氏のいう〈他者〉^⑦の概念とも重なる。丸木夫妻、あるいは「原爆の凶」は他者どのようなに出会ったのか、あるいは出合い損ねたのか。米山氏は〈他者〉とカッコなしの他者を使い分けているが、丸木夫妻からすればタイプの異なる他者たちといかに向き合い交信しえるかという難題を抱えていたということになるだろう。

巡回展が広島では不評だったことは、いまだ被爆の記憶が生々しい広島らしい反応といえる。それに加えて、大道あやの丸木夫妻への批判に見られるように、「本物」を見た人間と後から見た人間の間の断絶をも浮き彫りにするものだった。被爆者は「他者」として夫妻と対峙したということになる。ただ、長崎での反応は広島とは異なるようだ。位里が広島出身であること、長崎の展覧会の方が広島より二年以上後であることも関係するのかもしれないが、両都市での反応の違いをどう理解したらよいか、評者にはまだよくわかっていない。また、広島以外の場所では、被爆者が絵の前に飛び出してきて自分の被爆体験を語り出すといった光景も見られた。あるいは朝鮮人はこの絵を見て何を思ったのだろうか（在日朝鮮人や韓国人からの反応は、第十四部の「からす」が描かれた後のものが多く記録されているようだ、その前はどうかだったのか）。巡回展の多様性や観衆の多様性に加えて、そこから生じる反応の違いについても論が深められればよいと思う（ジェンダー差を加えてもよいかもしれない）。

三点目は、時代性のとらえ方である。時代性については、同時代における意味の再考と同時に、今日的意義の二つがある。巡回展がこれだけ盛り上がったのは、占領下という制約で原爆の実態

も知られていない中、人々に知らしめたい、人々の知りたいという意欲が相乗して実現したものだと思えることができる。朝鮮戦争や第三次世界大戦への危機感も共有されていた。それは米山論文がいう(いま、ここ)を生きる人間の感覚としてである。また、娯楽が少ない中、「怖いもの見たさのような感覚」(七七頁)をもって受容されていたという側面もあるだろう。その裏返しとして、「原爆の図」はその後忘れ去られそうになる。ただ、忘却の理由を、政治情勢の変化や『アサヒグラフ』に代表されるような他の視覚媒体の氾濫、娯楽の多様化といった外在的要因で説明するのは正しいとしても、それだけだろうか。巡回展の盛衰を文化運動論として内在的に説明することは可能だろうか。これはサークル運動や生活記録運動といった、五〇年代の文化運動の盛衰全体にも関わってくる。

そしてこれは五〇年代研究の今日的意義ということにも関わってくる。岡村氏自身は「現在とはまた違う困難があった時代に『伝えたい』と願った人々のエネルギーを感じ、思いをはせることは私たちの糧になるはずだ」(読売新聞「二〇一六年二月五日」と語っていて、それはそうだと思うのだが、もう少し積極的な意義付けがあってもよい気がする。当時とは異なる現代において「糧になる」とすれば、どのようにだろうか。巡回展が観衆参加型の催しだったという点に、今日的意義は見いだせないだろうか。

四点目は、巡回展が果たした社会的機能である。これについては、前述の「平和利用」の宣伝もその一部に含められる。また、益田肇論文の「精神安定装置」⁽⁸⁾という指摘にある「原爆展」に関する社会的役割の考察は、「原爆の図展」とどれだけ重なり合

うものなのだろうか。「原爆展」の方は知識の提供に重点を置き、「原爆の図展」は絵画という違いはあるかもしれないものの、「原爆展」の中には「原爆の図」の展示を組み込んでいるものもある。益田氏の「精神安定装置」という皮肉さが漂う表現には、「原爆展」が人々のものの見方に枠をはめ、「このように理解するものだ」という解答を示して思考停止に陥らせたという意味が込められているだろう。一方岡村氏の「原爆の図展」に対する評価はより肯定的である。

これらの点については、さらなる資料発掘の余地がどれだけ残されているかにも関わってくるだろう。岡村氏は関係者への聞き取りも行なった(二五頁)というが、それによって得られた文字資料はさておき、本書では関係者の語りはほとんど活用されていないように見受けられる。聞き取り調査からどれだけ手がかりが得られるか、著者の見通しをうかがってみたい。また三点目と四点目は、資料の掘り起こしもさることながら、理論や視点に強く関わってくるものだろう。五〇年代あるいはそれ以降の時代も含めた文化運動研究の蓄積との接合が、知見をどれだけ複合的・立体的にできうるか、とでもいうべきだろうか。

最後にもうひとつだけたずねるとすれば、岡村氏の今後の研究の方向である。本書の守備範囲は五〇年代が中心ではあるものの、その後の時代についても簡単に記されているように、後の時代への延伸が真っ先に思い浮かぶ。たとえば八〇年代については本誌一四号に掲載された拙稿も不十分な議論をしたが、岡村氏はより深く包括的な議論を展開できるだろう。五〇年代に巡回展に携わ

った人たちが、八〇年代になって再び企画するとか、絵によって人生が変わっていった人たちの足取りを追うことも含まれるだろう⁽⁴⁾。あるいは、昨年アメリカで行なわれた展覧会は、アメリカでの原爆使用をめぐる認識（若い世代では原爆使用を正当化しない割合が増加していると聞く）と絡めてまさに今日的なテーマである。岡村氏ならではの領域が広がっているのはまったくもってうらやましい。

ないものねだりが過ぎてしまったとしたら、著者のご海容を乞う次第である。

注

1 『大阪大学日本学報』三二号「特集 被爆体験とその表象」二〇一三年、二六頁。

2 米山氏の主張の文脈がわかりやすいように、長めに引用しておく。

米山リサ「丸木位里と丸木俊——「核」を描くということ」テッサ・モリスズキ編『ひとびとの精神史 第2巻 朝鮮の戦争 1950年代』岩波書店、二〇一五年、から。米山氏は、朝鮮戦争勃発に対する危機感が二人を駆り立てたのではないかという。「この緊迫した時代背景を考えるなら、ふたりの画家を創作へと駆り立てたのは、かつてみたものを描かねばならないという目撃証言への衝動であったと同時に、それをいま、まさに起こりつつある暴力に結びつけないでいられないという、作者自身も意図せぬ力だったといえるかもしれない。彼らがそこで描こうとしたのは、広島と長崎ですでに起こってしまった惨劇に加え、記憶と記録に刻まれたその光景に投影された、起こりつつある未知の破壊と想像力だった。丸

木たちはまさにこのような同時代的な（他者）によびかけられていたのである」（一四二頁）。

（他者）について米山氏はこうも述べる。「しかし、原爆による破壊を「描いて残す」ことと、それを伝えることは同じではない。（他者）によびかけられそれに応えようとする」と、他者を代弁すること、あるいは原爆被害者になりかわって被爆の惨状を人びとに伝えることは、重なりつつも深く遠く隔たっているのである。一九五〇年代後半、反核平和運動のたかまりのなかで歴史の前景に押し出されていったふたりの画家の輝かしい軌跡は、この隔たりを超えてしまう危うさと、それでもなお関与しつづけることの難しさをわたしたちに示している」（一四七頁）。

3 これも文脈がわかるように長めに引用する。益田肇「京都大学同学会——戦後史における原爆展のもう一つの意味」テッサ・モリスズキ編『ひとびとの精神史 第2巻 朝鮮の戦争 1950年代』岩波書店、二〇一五年。「言うなれば、当時想像以上の人氣を博した原爆展は、それ自身が入り乱れ錯綜する戦争の記憶を整理する一種の社会的装置だったのではないだろうか。さらに思考を進めて、この「せめぎあう記憶」という時代背景を、原爆展人氣を考える上での補助線として引いてみれば、「戦争の記憶」と「戦後平和運動」との関係性が、実は、まったく逆だったのではないかと見ることまでできる。…戦争の記憶が平和運動の動機になったというより、むしろ、そうした原爆展や平和運動を通してこそ、一定のタイプの「戦争の記憶」が作られ、共有され、主流の地位を得たのではないだろうか。しかし、いったいなんのために？」（二二九頁）。「原爆展は、単に広島・長崎の原爆被害を伝えるという展示ではなく、

戦中から戦後への移行を助ける現実的なステップとして機能し、観客をも巻き込みながらそれ自体が発展する一種の精神安定装置として機能していた。軍国少年の記憶を整理して平和少年への道筋を準備したのも原爆展だったし、戦時中のさまざまな心情には触れずに、新しい時代の新しい信条を提供したのも原爆展だった。どの戦争体験とどのように向き合うのか提示したのも原爆展だった」（二三二頁）。評者の考えでは、益田論文の「精神安定装置」という鋭い批判をいったんは受け止める必要はあるだろうが、「原爆展」や「原爆の図展」がすべて「精神安定装置」に収斂されるわけでもなからうと思う。

4 注1に同じ（二五―六頁）。

付記

本稿は、第五〇回原爆文学研究会（二〇一六年五月一四日、於山口大学）での報告である。著者の応答を求めるような書き方になっているのは、著者の岡村氏が研究会に同席したためである。

（二〇一五年一〇月三〇日 新宿書房 二九二頁 二四〇〇円＋税）